

久米賞 佳作 受賞作品

月

星

とても暗い夜に現れる
唯一の大きく明るい光

郡山市立緑ヶ丘中学校

太陽

空から僕らを照らす
あの大きな光を見てごらん

情熱を持つあの光は僕らに
厳しさを。恵みを。
そして
時には優しさをくれる

この感情を
僕らはどう捉えるべきか

土星

それは優しく、僕らを照らす
ほんのりと輝く姿
時々欠けてしまうけれど
再び満ちて再び輝く
それは僕らが望む希望の光のよう

この希望を
僕らはどうつないでいくか

ガスでできたそのからだ
それは目に見えるだけ
それはすべてをすり抜ける

目にはしっかり映るのに
誰にも触れてもらえない

孤独を感じるその星はまるで
どうしてもつかめない
僕らの心の様だ

地球

青く輝く

生命を抱く星

それは銀河の中でわずかにある
環境で 自然の中で 社会の中で
懸命に生きて 消えていく

そして 先代から その先代から
つながれたその命には
絶対に 生まれた意味がある

僕ら

僕らは今

星のように輝いている 生きている

この銀河の星それぞれのよう
いろいろな感情を持って
満ちては欠け 満ちては欠け
未来を抱き 創造する

僕らは個性に恵まれた
数少ない星・・・
この先を 未来を

僕らはどう造るのか

それはまだ どんな星にもわからない

(指導教諭／三浦知美)

《作品の意図》

この銀河系の数々の星と、私たち生命と、感情に重ねて書きました。また、国語の授業で習った表現技法をできるだけ活用できるように工夫しました。

《作品の寸評》

銀河系の星々と、私たち人類の数え切れないほどの生命とを重ね、中学生らしい素直な思索と表現技法で五篇の詩を編んでいる。「太陽」では「情熱」や「感情」、「月」では満ち欠けや「希望」と言った、シンブルながらも真つすぐに、読む者の心に入ってくるキーワードのような言葉が描かれている。「月」では、その満ち欠けを世の中の明暗とも言えるような例えとして用い、困難もあれば、必ず希望も見いだせるというメッセージを伝えているかのようだ。

三作目の「土星」は、ガスでできているその星を、目には見えないが「だれにも触れてもらえない」と表現し、なかなか理解してもらえない、孤独で多感な中学生の繊細な心情と重ね合わせて、秀逸な作品である。脈々とつながる命を抱く星としての「地球」、そして最後の「僕ら」と読み進めると、たくさんの命一つ一つに個性があり、その一つ一つが未来を創っていくのだという理想と希望が感じられる。未知の宇宙には不安もあるけど、僕個人ではなく、「僕ら」であれば、きっと様々なことも乗り越えられる、そんなことを想像させてくれる作品である。

(審査員／吉井美香)